

浮舟 ソンネ

あずまや
四阿から望む、きらめく白の中

唇のなまめかしきを

寄る辺なきはこの世界
抱き寄せるはうつろいやすき温もり

流れる者さえも雪を溶かし去れず
私達の目を射る白、また白

振り返る瞳は怖れを宿し
かつはまた陶酔を宿す

梢よりぱさりと落ちる音に
君は死をのみ想い、私を愛す
まるでこの時を待っていたかの如く・・・

頬を刺す微風も愛と感じ
私たちを押し潰そうとう沈む大気にも心しみ
ああ、今やこのふたつの心に追いつける者は誰もいない

(1992.2.13)